



第73回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

“社会を明るくする運動”神戸保護観察所長賞・高砂市保護司会長賞
「社会の絆」高砂市立松陽中学校 3年 石井 心陽

「どの道で行くの？何時に帰ってくる？帰ったら連絡入れてくれる？」もう小学生でもないのに、出かける時には必ず母に矢継ぎ早に質問攻めにあう。もちろん携帯にはGPS装備。少し過保護過ぎない？と思うこともしばしばだが、どうやら母の心配性は過去の経験から来ているらしい。

母は学生の頃、大阪市内でアルバイトをしていたそうだ。今でこそ減少傾向にあるものの、当時は犯罪発生率が全国1位の地区、とりわけ「ひったくり」の発生件数は群を抜いていたようだ。母は当時、アルバイトの帰りに2回のひったくり被害、2回の自転車盗難に合い、怪しい雰囲気の人に声をかけられることはしょっちゅうだったと言う。その頃のトラウマが未だに蘇り、夜道を歩くときは心臓が高鳴るそうだ。母はそんな経験を娘には絶対にさせたくないという思いから、帰り道の安全への配慮が念入りになっているのだろう。テレビの犯罪の特集で見た事のある、ひったくりや万引き被害。凄腕のGメン達に捕まった犯人が、職務質問を受けるが、その様子を見てみると、皆が皆、凶悪な根っからの犯罪者！という雰囲気でもなさそうなのだが、モザイク越しの映像からも感じ取れる。ひったくりの総額も3万円程度であったり、万引きにおいてはおにぎり1個、というケースもあった。あっさりと罪を認める犯人も多く、注目すべきは、特段生活に困窮している訳ではない、という犯人が多い点だ。では何故人は、罪を犯してしまうのだろう。「つい」「出来心で」と、自分の中の道徳観がブレてしまう瞬間は、一体どんな瞬間なのだろうか。

そんなことを考えていると、人間は誰しも、現在そして未来にわたり、罪を絶対に犯さないとはいきれないのではと思えてきた。何かの拍子に危険因子が生まれ、それが偶発的、もしくは自発的な引き金によって発動してしまうのではないだろうか。そうだと仮定すると、逆の発想で、危険因子が発動しないような、引き金ではなく踏みとどまらせる何かがあると、人は犯罪を起こさずにいられるのではなかろうか。

私が今まで、自分の中の道徳観がブレなかったのは何故なのか、また、それが揺るぎないものとなって行く過程とはどんなものだったのか

と考えた時、心にじんわり浮かんできたのも、それは「絆」だった。様々な絆が人や社会との「つながり」となり、道徳観との「ボンド」役として機能していることで、犯罪行動の方へ引きはがれない仕組みになっているように感じたのだ。

「絆」ひとつには、身近な親しい人への愛情や尊敬の気持ち、「感情レベルでの絆」がある。自分が強い愛着を抱いている相手へは、逸脱した行動をとることでがっかりさせたくないと感じるし、尊敬している人の価値観やルールには共感を覚え、自分のものとして取り込んだりもする。そんな中で道徳観が少しずつ確固としたものになっていくのではないだろうか。

そしてそのような尊敬する人、憧れを持つ人達が、今までの私のどのライフステージにも存在した様に思う。保育園の時には習い事の先生、小学生の頃は地域の活動団体で出会う少し年上の友達や、大学生のサポートリーダー。そして中学生では、部活の先輩。そのような人達に出会える環境にあること、その時々活動にコミットしながら、触れ合っている人々の意識に触れ、自分の存在意義を感じ、自分の行動や生活に価値を見出していくことがふたつ目の絆、「意識レベルでの絆」ではないかと思う。「きまり」という社会レベルでの規範は自分とは関係のない所にあるのではなく、生活のあり方、生き方として存在し、周囲との対話を通じて意識され、そしてまた自分も行動規範となって行く。そのように考えると、二つの絆の醸成には、私が数々様々の人達に関わりうる愛着や憧れをもってきたように、地域の様々なコミュニティとの「対話」が重要な鍵となってくるのではなかろうか。

非行に走るのは全体から見ると少数派で、そちらに視点を向けると、「何か特別な事情があって…」と特別視しがちになるが、なぜ犯罪行為を起こさないか、という側に視点を向けると、犯罪行為自体が特別なのではなく、人や社会との絆が弱まると誰しもがそうなり得るのかもしれないということになる。きっとこの「絆」を、社会全体で作っていきやすい取り組みができれば、母の恐れる「犯罪率」は下がってくるのかもしれないと感じた。

